

オープニングレセプション

2013年7月24日(水) 17:00-19:00

ギャラリーツアー

2013年7月27日(土) 14:00より作家による作品解説を行います。

詳細は<http://dandans.jp> または

<http://www.facebook.com/adandanss>でご確認ください。

会場：ヒルサイド・フォーラム

〒106-8514 東京都渋谷区猿樂町 18-8 ヒルサイドテラスF棟

会期：2013年7月24日(水)-8月4日(日)

時間：日～木 11:00-19:00 / 金・土 11:00-21:00

(入館は閉館30分前まで)

電車 東急東横線「代官山駅」徒歩3分

東急東横線・地下鉄日比谷線「中目黒駅」徒歩7分

JR・地下鉄日比谷線「恵比寿駅」徒歩10分

※駐車場はございません。ご来館の際は公共交通機関をご利用ください。

Venue: HILLSIDE FORUM

Period: from 24st [Wed] July to 4st [Sun] August 2013

Hours: Sun to Thur 11:00-19:00 / Fri and Sat 11:00-21:00

*Admission until 30 minutes before closing time. Admission free.

Access: ・3min. walk from Tōkyū Tōyoko Line "Daikan-yama Station"

・7min. walk from Tōkyū Tōyoko Line and Hibiya Line "Naka-Meguro Station"

・10min. walk from JR and Hibiya Line "Ebisu Station".



えねるぎい ふおあす “Energy for us” - from the artists' point of view -

アーティストの視点から

2013年7月24日(水)-8月4日(日)

入場無料・会期中無休

Exhibition No.10

アーティストのグループ「団・DANS」が代官山ヒルサイド・フォーラムという素敵な場所で10回目の展覧会を催します。今回のテーマは私達にとって大きな問題“エネルギー”です。資源の無い、自然災害の多い日本に住む私達にとって解決の難しい、矛盾の多い問題「エネルギー」をアーティストがどの様に捉えるか?是非この展示を御覧になって、新鮮な驚きと一緒に楽しみながらエネルギー問題を考えて頂けたらと思います。

主宰者 麻生和子 & 団・DANS一同



石黒 元嗣
Mototsugu ISHIGURO

幸福感は必ずしも裕福なことで得られるものではない。誰でも現状を変えることは不安であるが、人類全ての人が「どうあるべきか」という問いに、真剣に向き合わなければならない時期なのだろう。



石元 靖大
Yasuo ISHIMOTO

時は現代。巨大台風が日本列島へ刻一刻と迫っていた。このままでは設置された風車が全て壊れてしまう恐れが……!果たして風神はこの危機を救えるのか?



岩岡 純子
Sumiko IWAOKA

身の周りの生活とテレビに映る遠くの人々の生活、同じ陸続きで感じる風、離れた風車が全て壊れてしまう恐れが……!果たして風神はこの危機を救えるのか?



江口 暢彌
Masaya EGUCHI

そこに何かが見え隠れした意味を見つけようとするのは、過去三百年間の発展がもたらした数多くの問題を解決するために、新しい認識方法や新しい意識のありようへの達する道標になると確信しています。



小笹 彰子
Akiko OZASA

福島避難区域に住んでいた女の子を想像し、「目に見えるもの、目に見えないもの」の世界がどのように変化し、感じているのかをエルフリーデ・イェリネクの戯曲を参考にしつつ描いた。



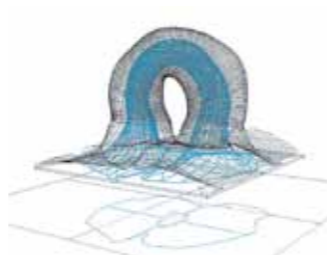
風間 真悟
Tengshing KAZAMA

福島原発20km圏から飛んだ風船は、風にのせられて世界のどこまで流れていくのか。僕たちが意図的に繋がろうとする想い「絆」と、僕たちが宿命的に繋がらざるをえない事実「絆」を検証する。



川上亜里子
Asako KAWAKAMI

再稼働が有力視される原発の周囲の土を使い作品を作ります。再び事故が起きた場合に備え、原発の周囲を故郷とする人が帰れぬ故郷の土地を持ち運ぶ為の道具を制作します。



菊池 省吾
Shogo KIKUCHI

エネルギーは形を変えて保存されていくが、そのエントロピーは増加する。そのような閉じた系と仮定する位相的なサーフェスが移りあう過程で、空間や物に力が伝わり様々な形を作り出していると考えます。



木下 千春
Chiharu KINOSHITA

光の粒が水に映る情景を描いています。古来からある波に千鳥をモチーフに作図。千鳥は光と波に揉まれており、エネルギーに対する虚像と現実、理想とが混沌とした様子です。



黒沼 真由美
Mayumi KURONUMA

今稼働している全ての原子力発電所は原子核分裂反応を利用している。核分裂と核融合は逆。メルトダウンを核融合とは言わない。炉心溶融で核融合は起きない。日本では核という言葉が使えない。



小林 雅子
Masako KOBAYASHI

震災以降“多くの人々が傷ついている”それを癒す為、油紙とギブスで、未来へと向かう箱舟を作る。その上には蜜蝋製の原子力発電所。蜜蝋の香りは心と体を治癒し、また自然と共存する一つの道なのだ。



佐々木 悠介
Yusuke SASAKI

地球と太陽の熱バランスを保つ雲。自然の一部である人間と都市の融合的関係の思索。



丹野 友貴子
Yukiko TANNO

絶えなく流れる時間の中に「一瞬」はどこにあるのか。一瞬間を測るための風景。



土屋 紳一
Shinichi TSUCHIYA

福島第一原発の運転が開始された年に製造されたテープレコーダーを解体し、その過程を写真に収める。40年間何を記録し、再生したのだろう。テープレコーダー本体から記録そのものを問い直す。



中澤 小智子
Sachiko NAKAZAWA

エネルギーとは何だろうか?と考えると、自然や地球や宇宙にまで思いが広がります。人の力ではどうすることも出来ない圧倒的な力、古来よりその象徴である龍の姿を拝借し作品にします。



中田 ナオト
Naoto NAKADA

芸術はエネルギーの一部であり、エネルギーも芸術の一部だ。私たちの生命にも同様のことが言える。人間の生命の象徴としての権力や欲望について、ユーモアやアイロニーを交えて問題提起したい。



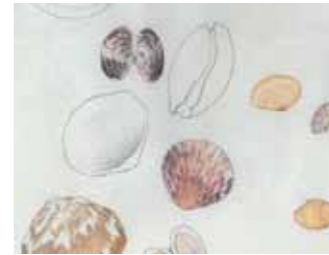
滑川 由夏
Yuka NAMEKAWA

避けて通れない問題を、考えているふりしながら通り過ぎる。さりげなく自分の周りから問題を排除して日常をやり過ごす。こういった“スキル”を身につけながら生きるという事をテーマにしています。



野口 一将
Kazumasa NOGUCHI

シャンデリアに照らされたダイニングテーブルを囲む家族の平和的な日常は、暴大な電力と引き換え。だけどそれは悪魔的な力。全て失う絶望と何かを得る可能性を同時に運ぶ、薄氷の上の契約。



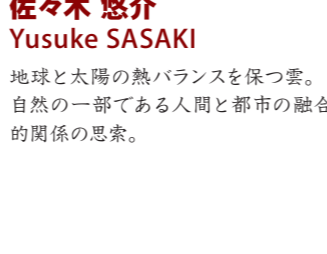
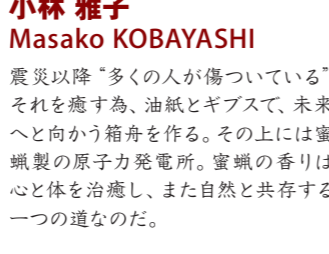
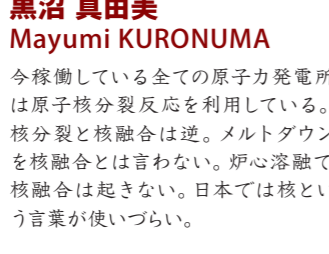
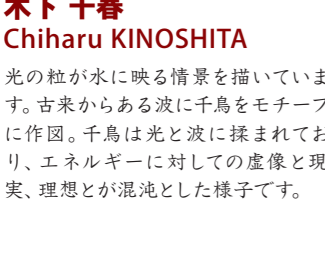
野口 満一月
Mitsuki NOGUCHI

原発事故で失ったものは戻りませんが、未来を変えて行く事は出来ます。美しい風景、安全で清らかな水…。それは、人が人らしく生きていく上で不可欠なものなのです。



長谷川 創
Hajime HASEGAWA

人類は人工と自然のどちらと共存していくのか、その対極する選択肢をアンビバレントに作品へ投影する。



松元 久子
Hisako MATSUMOTO

その形は透明でいて、曖昧なままでありますが、決してinvisibleなものではありません。未来への希望を託したものであり、渴望する叫びの形でもあるのです。



村山 之都
Shitsu MURAYAMA

かつて実際に考案され、あまりの効率の悪さに爆笑と共に消えていった「人力シャワー」から発想。「効率的に大エネルギーを取り出す」という目的とは異なる領域をひとつの可能性として取り扱う。



矢部 裕輔
Hirosuke YABE

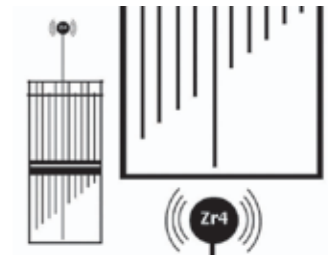
エネルギーは産業や日常生活を支えるために不可欠なもの。しかし大量消費の考えはこれからも必要なのか。私達はそういう意味で私たち社会の「幸福の条件」をもう一度見直してみるべきなのでは。



山田 啓貴
Keiki YAMADA

「1939年に、科学者12人が会議を行ってれば原子力の開発を止められたろう」とハイゼンベルクは言った。人間の倫理観に対する疑問提起と再認識のために、その行われなかった会議を描く。

Director Kazuko Aso & DANDANS Artusits



前田 真治
Shinji MAEDA

核燃料棒の素材を手に入れる為に、オトナに頭を下げ、ルートを確保し、必要な金を稼ぐ。僕はエネルギーの素を得る為に相当なエネルギーを使った。そして、僕は電気じゃなく音楽を生産し始める。



太湯 雅晴
Masaharu FUTOUYU

25年前、福島原発の所在する双葉町で市主催の原発標語コンクールが行われ、当時、小学生だった少年の応募案が選ばれた。原発を讃える内容のそれは町の入口に掲げられ、町に来る人々を迎えた。



藤井 志帆
Shiho FUJII

福島第一原子力発電所の建家に描かれていた青空のようなあの壁が崩れていく様は「矛盾した現実」を象徴しているように見えた。震災から2年。今も矛盾した現実があらゆるところに存在している。



久村 卓
Taku HISAMURA

美術さえ道具になってしまうかもしれない時のために。